ＪＥＡＳ２０２６－１１９
令和８年11月26日

各　　位

一般社団法人 日本環境アセスメント協会
教育研修委員会委員長　小島　　淳
セミナー委員会委員長　湯浅　晃一

＜一般公開＞

2026年度JEAS第22回技術交流会（Web開催）のご案内

拝啓　時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

（一社）日本環境アセスメント協会では、会員相互の技術交流及び業務の活性化並びに会員の有する環境アセスメント関連技術の内外への発信等を目的として、口頭発表を行います。

会員、会員外を問わず、多数の方々にご参加頂きたくご案内申し上げます。

敬具

記

１．開催日時　　2026年12月4日（金）13:05～15:15
２．開催要項　　口頭発表、別紙プログラム等参照
３．開催方法　　JEAS技術交流会専用HP上でのライブ配信（Zoom使用）
※ 技術交流会の参加申し込みをいただいた方には、技術交流会専用URLと接続方法のご案内をお送りします。
なお、申込者のお名前で接続をお願いします。また、安定的な配信を行うため、複数接続（一つのアカウントで複数の端末からアクセスする方法）は禁止します。
※ 発表へのご質問等は、Zoomのリアクション機能やチャット機能をご活用ください。
４．参 加 費　　無料
５．募集人数　　250名　先着順
６．申込〆切　　2026年12月3日（木）　（定員になり次第、締め切ります。）
７．申込方法　　申し込みフォーム　https://jeas.org/gijyutukouryu-form/
に必要事項を記入してください。
８．そ の 他　　この技術交流会はJEAS-CPD制度の認定プログラムです。
環境アセスメント士の方は登録番号を記入してお申し込みください。

****
2026 年度 JEAS 第 22 回技術交流会(Web 開催)プログラム
****

2026 年 12 月 4 日(金)　Web 開催

13:05～13:10	開会挨拶

【口頭発表】

1	13:10～13:30	インフラ分野におけるドローン活用について	宮本 冬馬	八千代エンジニヤリング（株）
2	13:30～13:50	干潟再生における物理環境と生物応答の関係に関する評価・検証	難波 広樹	日本工営（株）
3	13:50～14:10	環境業務支援に向けた RAG 活用の検討	伊藤 丈乃	アジア航測（株）
休　憩（15 分）				
4	14:25～14:45	卵殻試料を用いた遺伝子分析による鳥類種同定手法の検討	本澤 大生	（一財）三重県環境保全事業団
5	14:45～15:05	環境 DNA 分析による両生類調査 福島県阿武隈高地における直接調査との比較事例	寺井 学	（株）大林組

15:05～15:10	口頭発表閉会挨拶
15:15	閉会宣言

注 1）プログラムの氏名は代表者のみ記載しています。共同発表者は次頁以降の要旨をご参照ください。
注 2）プログラムは変更する場合があります。

****

2026 年度 JEAS 第 22 回技術交流会(Web 開催)要旨

****

1.「インフラ分野におけるドローン活用について」

発表者：(代表者) 宮本 冬馬　　所　属：八千代エンジニヤリング株式会社

技術紹介の要旨：

インフラ分野におけるドローンおよび最新 3D 計測・モデリング技術の業務活用と災害対応事例について紹介します。

- 従来の SfM (Structure from Motion) 技術を使った能登半島豪雨における被災状況把握などの現場活用事例
- 立体構造物の高精細な 3D モデリング技術 (3D ガウシアンスプラッティング) を使ったインフラメンテナンス事例
- 衛星通信と太陽光発電を備えたオフグリッド型ドローンポートによる遠隔自動での斜面監視実証
- 水上ドローン・赤外線カメラ等を用いた多角的な業務活用事例

2.「干潟再生における物理環境と生物応答の関係に関する評価・検証」

発表者：(代表者) 難波 広樹　　所　属：日本工営株式会社
(共　同) 五十嵐 美穂、左右田 結香　　所　属：日本工営株式会社
清水 隆博、渡邉 健人

技術紹介の要旨：

木曽三川下流域では干潟やヨシ原の再生が進められているが、従来の生物指標による評価は年変動が大きく、再生の成否を左右する要因の検討も不足していた。そこで干潟再生箇所 12 箇所を対象に、準二次元不等流計算および平面二次元数値解析で得た水理諸量から、堆積、水衝部、澪筋との距離、近傍流速、砂州形態の 5 項目を各 5 点、25 点満点で点数化し、河川環境管理シートの得点等と組み合わせて整備効果を多角的に評価した。その結果、8 箇所が 20 点以上となり生物モニタリングでも概ね良好であった。低得点の 4 箇所は堆積のしやすさや澪筋との距離の評価が低く、うち 2 箇所は生物評価も低かった。河川環境管理シートの多様性評価値の経年変化とは、概ね同様の傾向を示す一方で異なる点も確認された。発表では、これらの評価手法の有効性等について議論する。

3.「環境業務支援に向けた RAG 活用の検討」

発表者：(代表者) 伊藤 丈乃　　所 属：アジア航測株式会社

技術紹介の要旨：

近年、生成 AI の急速な発展に伴い、知識集約型業務における活用が期待されている。一方で、環境業務では法令や指針、技術資料等の参照が必要となる場面が多く、生成 AI の回答精度や根拠の妥当性をどのように確保するかが課題となる。

本検討では、環境業務への生成 AI 活用可能性の把握を目的として、法令等を対象とした検索拡張生成 (RAG) の適用を題材に、回答精度の評価や有効な活用場面について整理を行った。現時点での検討状況と今後の課題について報告する。

４．「卵殻試料を用いた遺伝子分析による鳥類種同定手法の検討」

発表者：（代表者）本澤 大生　　所　属：一般財団法人三重県環境保全事業団
（共　同）森村 浩行、鈴木 淳史、　　所　属：一般財団法人三重県環境保全事業団
菊地 昭、齋藤 紘輝、峯 和也、
大橋 小都恵、森 俊哉

技術紹介の要旨：

自然環境の評価において鳥類の繁殖行動は重要な意味をもつ。しかし、繁殖行動を確認するのは難しく確証を欠く場合がある。そこで本研究では、巣の付近から採取した卵殻の遺伝子分析による種同定を試みた。周辺の営巣環境からオオタカ、サシバ、フクロウ、シロチドリと推定された卵殻を試料とし、0.5M EDTA による脱灰と精製を経て DNA を抽出した。ミトコンドリア DNA の COI 領域を対象に PCR を行い、得られた配列から BOLD SYSTEMS で種を同定した。分析の結果、オオタカ、フクロウ、シロチドリは想定通り同定された。特に根拠が乏しく卵殻が唯一の手掛かりであったオオタカでは、繁殖行動の信頼性が大きく向上した。一方、サシバと推定した卵殻はカルガモと同定され、遺伝子分析なしには把握困難な結果が得られた。本研究により、卵殻を用いた遺伝子分析は鳥類の繁殖行動を客観的に示す手法として利用可能であることが示唆された。

５．「環境 DNA 分析による両生類調査 福島県阿武隈高地における直接調査との比較事例」

発表者：（代表者）寺井 学　　所　属：株式会社大林組

技術紹介の要旨：

採水試料の環境 DNA 分析による両生類の生息判定は、野外での知見が乏しく、水を汲めば簡単に調査できるわけではない。また、両生類は繁殖期の移動などの生活史サイクルが気象条件によって左右されるため、従来の直接調査を効率的に行うことは難しい。そこで、福島県阿武隈高地の一地域において、流域を考慮した調査エリアを設定し、環境 DNA 分析による両生類の調査を実施した。2024 年 6～10 月に予備調査、2025 年 2～9 月に本調査（6 地点、計 9 回）を行い、各地点で約 1L の水を採取した。得られた結果を、従来の直接調査の結果と比較し、環境 DNA 調査の検出特性について考察した。その結果、以下の知見が得られた。

(1) 環境 DNA で検出した小型サンショウウオ類を、翌年の直接調査で生息確認できた。
(2) 陸上生活の割合が多いと考えられるアカハライモリは環境 DNA で検出されにくかった。
(3) 累計 100mm 以上の降雨後に行った採水では、比較的多くの種を環境 DNA で検出した。